資料

社会学史関係資料

尾高邦雄の著作目録

川合隆男
吉村治正

序
一　単行書および訳書
二　論　文
三　座談会録・学会議事録・エッセイ・その他

序

本資料は、戦後アメリカ産業社会学の導入によって日本における産業・労働社会学の確立に寄与したと評価される尾高邦雄の研究上の足跡を確認し、日本における社会学の展開の考察のための基礎資料を提示しようとするものである。

日本における産業・労働社会学は、戦後アメリカ社会学の影響の下に大幅に研究対象が拡大されていった中で確立した、いわば「新しい連字符社会学の諸分野」の一つとして数えられており、その意味で「固有の戦後社会学」とみなされている。しかしながら、今日産業・労働社会学のかかえる問題関心から遡及していったとき、戦前においても横山源之助による貧民と職人の研究や片山潜らの労働問題への関心、高田保馬の分業論と職業論、戸田貞三の国勢調査に基づく職業構成と移動の研究など、注目すべき研究は多々在り、また日本における産業社会学の発展は第二次大戦後の現象であるとした尾高邦雄自身が戦時中に『職業社会学』を著していること、さらには同じ時期に行われた藤林敬三や篭山京などの労働調査・労働衛生調査などの試みなどを考えると、必ずしもそうした一面的な位置づけは与

えにくい。[1] このような中で、社会学の展開における戦前と戦後の連続性が指摘されるとするならば、尾高の研究足跡は戦前と戦後の結節点として、産業・労働社会学の系譜を考察していく上で重要な争点となろう。

今日から見て、尾高邦雄の主たる研究領域は大きく四つの分野に類別される。第一の分野は、社会学論とでも言うべき領域で、社会学という学問領域そのものに対する研究である。第二の分野は一九三〇年代半ばから五〇年代にかけて展開された職業社会学、第三の分野は、今日の通称SSM(Social Stratification and Mobility: 社会的成層と移動)調査へと展開していく社会成層論、第四の分野は職業社会学を継承する形で展開された産業社会学である。以下、その経緯をたどってみたい。

(一)

尾高邦雄は、一九〇八年、東京府東京市下谷区中根岸町に尾高次郎と文子の五男として生まれた。父である次郎は当時朝鮮興業社長。兄弟関係では、長兄・豊作が後に刀江書院社長となり、同時に郷土教育連盟理事を務めた。また、三兄・朝雄が法学者、国家社会学者として京城帝国大学教授を経て戦後東京大学法学部教授となった。邦雄の回想録を見るかぎり、経済的に裕福な環境で育った事、また特に朝雄からの影響を強く受けていたことがうかがわれる(「亡き兄朝雄の思い出」、一九五六)。

一九二六年、旧制第二高等学校に進学。ここで同じクラスの「ブームに近い雰囲気」と岸貞雄(後、東京社会科学研究所に参加)の影響を受け、マルクス主義の理論的把握を動機として社会科学への関心を持ち始める(「青春時代の読書行動」、一九八五、一九三頁)。一九二九年、東京帝国大学文学部社会学科に進学する。このときに社会学を選択した理由は「東大の経済学部を選んだ。ところが思いがけず入試に失敗したので、その年にかぎり二名の欠員があった文学部社会学科の補欠試験を受け……幸いにパスして東大に入学した」(「なぜ、社会学を選んだか」、一九六六)とされている。従って、「入学当初はまさに迷い雀といったていで途方に暮れていた」状態が続き、当時の綜合社会学と形式社会学の対立という状況の中で、「社会学の基本的性格を把握しようとする努力を重ねていた」(「青春時代の読書行動」、一九五―一九九頁)。このような中で「彼の社会学の定義がいちじるしく問題的で挑戦的であったから」という理由により、マックス・ウェーバーへの関心を持つようになる(「青春時代の読書行動」、一九五頁)。

一九三二年、「社会学における了解的方法」と題する卒業論文で社会学科を卒業。[2] 同時に東京帝国大学文学部に副手(無給)として採用される。また同年、清水幾太郎と共に東京社会科学研究所の主任研究員となる。[3] この当時、尾高邦雄はマックス・ウェーバーの社会学方法論に関する研究を進めていた。卒業論文に加え、「没価値性批判――社会科学の現代的基準に関する

覚書――」（一九三二）、「没価値性の問題」（一九三三）、「自由主義の科学論」（一九三三）では、ウェーバーの価値自由論に関する検討を行っている。回想録の中で「ぼくのウェーバーとの格闘は学問論や方法論上の文脈に」あったと述懐している（「青春時代の読書行動」、二〇〇頁）。この尾高の社会学論は戦時中「社会学の本質と課題――社会学再建の道――」（一九四四）を経て戦後『社会学の本質と課題（上）』（一九四九）、『社会科学方法論序説』（一九五〇）へと展開していく。

一九三三年、和辻哲郎の長女、京子と結婚する。なお、尾高京子はルース・ベネディクトの『文化の諸様式』の翻訳で知られている。

一九三四年、東京社会科学研究所が閉鎖勧告を受け、解散する。この頃、職業の問題への関心を持ち始めるようになり、その直接的な動機は「それまでのような方法論一点張りではなく、何か対象の側に自分の専攻すべき具体的な問題を持たなければならないと感ずるようになった」（『社会科学方法論序説』、九頁）事と、「学生時代マックス・ウェーバーの『職業としての学問』を読んで啓発された」（『職業社会学』、一九四一、三頁）ことにあったとされる。

一九三七年東京帝国大学文学部助手を経て、一九四二年同講師、さらに一九四五年同助教授に昇進する。「職業の倫理」（一九三五）、「職業学の成立」（一九三七）をもとに一九四一年、『職業社会学』を出版する。この『職業社会学』では「職業社会学の成立を企図したものであって、ここでは取敢へずその体系を整へることが目指されている」（『職業社会学』、一九四一、二頁）。なお、この『職業社会学』は一九四七年に文学博士号を授与されたときの、学位論文となった。

戦時中から戦争直後にかけての時期における尾高は、この職業社会学的研究に専念したといえよう。「職業観の変革」（一九四二）、「職業指導の二原則に就いて」（一九四三）、「勤労意欲昂揚の条件」（一九四五）は戦時労務動員体制下における勤労意欲の問題を取り扱ったものである。

一九四二年一一月から四三年三月にかけて岡田謙とともに、海軍特務部の委託を受け、中国の海南島へ現地住民の黎族の調査に向かった。この海南島調査は尾高にとって、「正真正銘の意識改革をもたらした」（「青春時代の読書行動」、一九一頁）。それまで「その頃はやりだった市役所や統計局流の数字いじりに類した『社会調査』にぼくは全く興味がなかった」尾高が「文化人類学の手法というものが…社会科学の認識枠組みそのものだということに気づくようになった」（「青春時代の読書行動」、一九一頁）。この調査以降、「海南島の手工業者生活」（一九四四）や「職業と社会集団――出雲地方の鉄山における生活共同態について――」（一九四六）という実証的な研究を展開するようになる。

終戦後、尾高は日本社会学会の再編の中で中核的な位置を占めていった。一九四九年日本社会学会の理事となり（一九六一

年まで)、同年ナショナルリーダー・グループの一員として渡米し、アメリカ社会学会との直接的交流を開始したほか、一九五〇年より一九五六年までISA(International Sociological Association: 国際社会学会連合)の理事をつとめる。

このISAによる国際比較調査の委託をうける形で始まったのが、今日SSM調査として知られる社会成層調査である。一九五二年に実施された六大都市における成層調査(「わが国六大都市における社会的成層と移動」、一九五三)と一九五五年に行われた日本における社会的成層と移動に関する標本調査(「わが国における社会的移動」、一九五六:『日本社会の階層的構造』、一九五八)の二つの調査は、共に一九五〇年ISAのチューリッヒ大会において提起された国際比較調査の一環として着手され、また調査の基本的な性格は一九五一年パリにおいて開催されたISAの研究協議会で決定された(「国際社会学会パリ会議に出席して」、一九五二、八四-九三頁)。尾高はこのパリ会議に理事兼研究委員として出席し、日本における両調査の実施に際して実質的な代表者として活動している。

他方、尾高は戦時中からホーソン実験に始まるアメリカ産業社会学に関心を示していたとされる。その直接的動機は、戦時中工場の労務管理の実態を見学していた際に「工場を一つの人間共同生活の場面としてとらえ、その内部にあるさまざまの人間関係を調整して、そこに自発的な協力態勢をつくることがいかに大切であるか」を痛感した事にあるとされている(「産業社会学の課題」、一九四九、三四九頁)。戦前から論じられてきたテイラー主義的科学的管理法では「一定の共同生活をかたちづくる成員としての人間は閑却されてきた」として、生産における人間の要素に注目する。五〇年代前半、「産業社会学の課題」(一九四九)、「産業社会学をめぐる最近の論争」(一九五〇)、「産業における人間関係の科学」(一九五二)などでアメリカ産業社会学の積極的な紹介を行い、五〇年代後半から六〇年代半ばにかけてアメリカ産業社会学の手法を取り入れた質問紙調査法による従業員の態度調査を四国電力、日本鋼管、日本光学などで展開していく。この態度調査から従業員の企業と労働組合への二重帰属性の問題が指摘されていく。

一九五三年、東京大学文学部教授に昇進。六〇年代以降の尾高の産業社会学は、人間関係論的管理法から経営参加論へと展開していくに従い、次第に応用的な傾向を強めていく。『日本の経営』では、「純学問的な書物ではないことは明らかだが」という但し書きが添えられている(『日本の経営』、一九六五、三二一頁)。一九六九年、東大を退職し、上智大学経済学部教授となる。一九七四年、日本社会学会会長に就任。七〇年代以降は産業民主主義論と経営参加論を展開し、一九八〇年『産業社会学講義』を著す。

一九九三年九月、脳梗塞により死去。享年八四歳。

（二）

今日、尾高邦雄は戦後アメリカ産業社会学の導入者として位置づけられている（遠藤、一九八七）。しかし現代的関心から遡及していけば、戦前において産業労働に関する社会学的研究がなかったとは決して言い得ない。そこで稲上らは、職業的社会学者として産業・労働・職業の問題を社会学の中に位置づけようとしていったという点で評価している（稲上・川喜多、一九八七）。

尾高の初期の社会学論の展開は『社会学の本質と課題（上）』（一九四九）の中に集約されているが、その目的は「社会学とは何かに関して新しく理論闘争を開始することではなくて、かえってかかる無用の議論を一日も早く終結せしめ、これによって社会学本来の課題の遂行を容易ならしめるにある」（『社会学の本質と課題』、二頁）とされる。新明によれば尾高の主張は「形式社会学から由来した独自の観点を綜合社会学の目的とする綜合的認識と結合することによってはじめて両典型の一方性を克服した完全な社会学の体系を主張している」ものと受けとめられた（新明、一九五一、三二一三三頁）。だが、この社会学論は結論を提示する前に打ち切られてしまう。そのため今日、高田や新明の社会学論が体系としてみなされているのに対し、尾高の場合は「実証的研究を通じて中範囲理論を構築していくところに社会学の課題を見いだし」たという評価が与えられている（森岡・本間・塩原、一九九三）。

職業社会学は、職業研究として評価されていた当時の職業心理学、職業調査論、職業道徳論を批判し、「職業生活とは個人活動がそれを通じて社会活動に編成され又社会活動がそれを通じて個人活動より構成されるところの生活である」（『職業社会学』、一二一頁）として「職業生活の全面的把握を企図する」（「職業学の成立（下）」、一九三七、七八二頁）ものとして構想された。そこで構想された争点は、(1)職業分化と社会構成、(2)職業団体、(3)職業意識および職業道徳、(4)職業の世襲と職業選択の自由、(5)大都市の職業生活、としてまとめられる。このうち、(2)および(5)は、戦時中の海南島の靴職人の研究（「海南島の手工業生活者」、一九四四）や、たたら吹き職人の伝統的共同体の研究（「職業と社会集団」、一九四六）という実証的な研究の展開をへて、戦後松島静男や中野卓らと共に行った、共同調査研究『鋳物の町』（一九五六、ただし調査期間は一九四八年から五〇年）へと展開していく。また、(1)および(4)は、変容を加えながら社会成層論の展開へとつながっていく。このような意味で稲上らは職業社会学に「わが国産業社会学最初のしかも規模雄大な鳥瞰図を看て取ることができる」として評価している（稲上・川喜多、四頁）。

社会成層調査に関しては、富永の回顧によれば、尾高は既にかなり早期のうちにNORC(National Opinion Research Center)の職業威信調査などに関心を抱いていたとされる。実

際、六大都市の成層調査を見れば、尾高が職業威信と社会的地位の関係について関心を抱いていたことがわかる(「職業の貴賤」、一九五三)。だが、一九六五年以降の社会成層調査に関しては、尾高が直接的に関与した形跡は見られない。

産業社会学の展開に関しては直接的に職業社会学の影響が見られる。職業社会学において尾高は、職業に対する個々人の態度、すなわち勤労に対する意欲の問題を論じているが、これは直接的に産業社会学へ反映する。尾高が積極的に評価し、紹介していったアメリカ産業社会学は、レスリスバーガーやメイヨーらを中心とした、人間関係論に基づくいわゆるハーバード学派の産業社会学であった。実際、『産業における人間関係の科学』(一九五二)、『産業社会学』(一九五八)、『技術革新と人間の問題』(一九六四)、『日本の経営』(一九六五)へと至る尾高の産業社会学の諸著作においては、従業者の労働意欲の問題へ議論が集中し、反面でグールドナーの官僚制の研究やムーアの近代化論と結び付いた産業研究などに対しては著しく関心が乏しい。むしろ尾高の構想した産業社会学においては、職場における労働モラールの昂揚が中心課題とされている。そのため、「産業における人間関係の研究といっても、実際はせいぜい職場の人間関係の研究にふさわしいものであって、……マクロな視野を必要とする問題には対処しきれなかった」(間、一九七五、一〇三頁)とする批判を受けることになる。日本型経営論のように、組織特性の分析に対して文化的な要素を前提とするような議論を前面に展開するようになるのは、一九七〇年代後半にはいってからの事となる。

著作目録は、一、単行書および訳書、二、論文、三、座談会録・学会議事録・エッセイ・その他、に分類し、この順序で収録してある。今回の著作目録は、福武・青井編『集団と社会心理』(一九七二)に収録の著作目録を参考に作成した(4)。

一　ここにあげた著作は、関東近県の大学図書館、国会図書館を始めとする公立図書館を中心に所蔵の確認を行い、その上で一九九三年八月現在で所蔵の確認が取れるものに限定した。例えば、福武と青井の作成した目録では『職業について』(一九五一、要書房)が含まれており、この書に関しては国会図書館を始め、いくつかの図書館に蔵書の記録があるが、現在いずれも紛失しており、所在の確認ができない状態である。ここではこのように確認が取れないものは一応除外してある。

二　《↓》内に記されているのは再録箇所である。本人が再録として出典を明記している場合は、加筆修正が加えられていても、論旨に変更がないかぎり再録とみなした。また、同一の論文が表題を変えて複数箇所に発表されている場合、文章が同一であることを確認の上で再録とみなした。英文の論文に関しては、本人が翻訳し、その出典を明記してある場合に再録とみなした。

三　《↓》内の表記は目録の表記に準じるが、表題その他に

変更がない部分は省略して表記した。ただし、単行書の中に再録されている場合は、再録先の単行書の番号を示すに留めた。なお、単行書目録の最後に付された【　】の中の番号は、再録箇所を示すための番号である。

（1）戦前における職業・労働研究は八木正「近代日本における職業研究の展開――職業社会学の成立前史――」、一九九三、大阪市立大学文学部紀要『人文研究』、第四五巻一一分冊、および布施鉄治・小林甫「わが国における労働・産業社会学形成過程に関する一考察」、一九七七、『社会学評論』、第一一〇号、参照。

（2）『東京大学文学部社会学科沿革七十五年概観』、一九五四、八四頁。

（3）清水の回想録によれば（清水、一九九三、二七〇頁）、この東京社会科学研究所は尾高邦雄の長兄であった豊作が社長を勤める刀江書院の一角に設けられていた。また、研究員として豊作、朝雄が名を連ねていることから推測すると、豊作の支援の下に運営されていたものと思われる。便覧（『東京社会科学研究所便覧』、一九三二、東京社会科学研究所）や機関誌（『東京社会科学研究所年報』、第一輯、一九三三）に記されたところでは、当時日本社会学会で活動していた安西文夫、岩崎卯一、臼井二尚、喜多野清一、清水幾太郎、宮田秀雄、尾高朝雄らが参加していた。ちなみに戦後、新明正道らによって設立された同名の研究所があるが、これと尾高らの所属した東京社会科学研究所とは別組織である。

（4）青井と福武の作成した著作目録には、単行書二二冊、論文エッセイその他を合わせて一七五編の著作が記載されている。このうち、一九九四年八月現在所蔵が未確認なのは著作三冊、論文その他合わせて三四編であり、訂正を要するもの九箇所であった。今回の著作目録は新たに著作五冊、論文その他三〇編を加えている。

一　単行書および訳書

単行書

一九四一　『職業社会学』、岩波書店　【一】
一九四四　『海南島黎族の経済組織』、海南海軍特務部　【二】
一九四四　『職業観の変革』、河出書房　【三】
一九四八　『職業と近代社会』、要書房　【四】
一九四九　『社会学の本質と課題（上）』、有斐閣　【五】
一九五〇　『社会科学方法論序説』、春秋社　【六】
一九五二　『労働社会学』（編著）、河出書房　【七】
一九五三　『新稿職業社会学』、第一・第二分冊、福村書店　【八】
一九五三　『産業における人間関係の科学』、有斐閣　【九】
一九五六　『鋳物の町――産業社会学的研究――』（編著）、有斐閣　【一〇】
一九五八　『日本社会の階層的構造』（日本社会学会調査委員会編、共著）、有斐閣　【一一】
一九五八　『職業と階層』（編著）、毎日新聞社　【一二】
一九五八　『現代の社会学』、岩波書店　【一三】
一九五八　『産業社会学』、ダイヤモンド社　【一四】
一九五九　『産業社会学』、講座『新しい経営と労働第一巻第二

冊』、有信堂 【一五】
一九六一 『勤労青年の不平不満とその対策』、民主教育協会 【一六】
一九六三 『改訂産業社会学』、ダイヤモンド社 【一七】
一九六四 『技術革新と人間の問題』(編著)、ダイヤモンド社 【一八】
一九六五 『日本の経営』、中央公論社 【一九】
一九七〇 『職業の倫理』、中央公論社 【二〇】
一九七五 *Toward Industrial Democracy: Management and Workers in Modern Japan*, Harvard University Press, Mass. 【二一】
一九八一 『産業社会学講義』、岩波書店 【二二】
一九八四 『日本的経営』、中公新書 【二三】

訳書

一九三六 マックス・ウェーバー著『職業としての学問』、岩波書店(一九八〇 改訳)

二 論文

一九二二 「了解、了解的方法、及び了解的態度」、『哲学雑誌』、第五四五、五四六、五四八号、東京帝国大学 《→【六】》
一九三三 「没価値性批判——社会科学の現代的研究基準に関する覚書——」、『東京社会科学研究所年報』、第一輯、刀江書院 《→「社会科学と価値判断」、【六】》
一九三三 「現実『郷土』と理想『郷土』」、『郷土教育』、第二八号、刀江書院
一九三三 「没価値性の問題」、『年報社会学』、第一輯、日本社会学会、岩波書店 《→「没価値性と社会科学における理論と実践の問題」、【六】》
一九三五 「自由主義の科学論」、『思想』、第一五二号、岩波書店 《→【六】》
一九三五 「職業の倫理」、『中央公論』、第五七一号、中央公論社
一九三七 「原理としての支配——支配社会学への序論——」、『思想』、第一八五号 《→「支配」、【六】》
一九三七 "Vocational Sociology", Japanese Sociological Society ed. *Sociology: Past and Present in Japan*, The Sansyusya Press, Tokyo.
一九三七 「職業学の成立(上、下)」、『思想』、第一八六、一八七号、
一九四二 「職業観の変革」、西牟田重雄編、『職業論』、大同印書館

《↓【三】》

一九四三　「職業指導の二原則に就いて」、文部省指導『職業指導』、第一六巻七、八号、文部省内財団法人職業指導協会

《↓【三】》

一九四四　「海南島の手工業者生活」、『年報社会学研究』、第一輯、日本社会学会、高山書院

《↓【三】》

《↓「手工業者の職業観――海南島調査の記録から――」、【二〇】》

一九四四　「戦意昂揚への道」、『構想』、第七巻一一号、河出書房

一九四四　「社会学の本質と課題――社会学再建の道――」、『思想』、第二六三号

一九四五　「勤労意欲昂揚の条件（一、二）」、『法律時報』、第一七巻三・四号、五・六号、日本評論社

一九四六　「日本人の『封建的』性格」、『饗宴』、第二号、日本書院

《↓「日本的封建性」、【四】》

一九四六　「職業と社会集団――出雲地方の鉄山における生活共同態について――」、『民族学研究』、新第三巻二輯、日本民族学会

《↓「職業と生活共同態――出雲地方の鉄山について――」、【四】》

《↓一九五〇 "An Iron Workers' Community in Japan: A Study in the Sociology of Industrial Groups", *American Sociological Review*, vol. 15, no. 2, American Sociological Association, N. Y.》

《↓「職業と生活共同体――出雲鉄山調査の記録から――」、【一〇】》

一九四六　「勤労観の再検討――特に『皇国勤労観』について――」、『職業指導』、第一九巻二・三号

《↓「新しい勤労観のために」、【四】》

一九四七　「社会学と社会学主義」、『社会学研究』、第一巻一輯、日本社会学会、国立書院

一九四七　「文化人類学と社会学」、『科学圏』、第二巻四号、青山書院

《↓【四】》

一九四七　「これからの社会学」、『社会圏』、第一巻一号、民族文化調査会、青山書院

《↓【四】》

一九四七　「仕事への奉仕――新しい職業のモラルについて――」、『人間』、第二巻八月号、目黒書店

《↓【一〇】》

一九四七　「社会科学と価値判断――われわれは今日マックス

ウェーバーから何を学ぶべきか――」、東大協同組合出版部編『学問と政治』
《↓「社会科学における客観性の要求について」、【四】》
一九四八　「職業」、田辺壽利編、社会学大系第五巻『職業と組合』、国立書院
一九四八　「労働実態調査報告――労働者層の生活態度について――」、『労働問題研究』、第一六号、中央労働学園
一九四八　「市民社会（一）――新しい人間団結の探求――」、『近代思想』、第一号、彰考書院
一九四八　「市民社会（二）――国家と社会、あるひは市民社会理念の系譜――」、『近代思想』、第二号
一九四九　「経営における人間の問題――科学的管理法への反省と産業社会学の立場――」、『労務研究』、第二巻五号、日本労務研究会
《↓「経営における人間の問題」、【九】》
一九四九　「産業社会学の課題――特にアメリカにおけるその発展を中心として――」、戸田貞三博士還暦祝賀記念論文集『現代社会学の諸問題』、弘文堂
《↓「産業社会学の課題」、【九】》
一九五〇　「ストライキの社会学」、読売新聞社科学部編『戦争と世界平和』、国民教育社
《↓【九】》
一九五〇　「産業社会学をめぐる最近の論争（上、中、下）」、『労働問題研究』、第四五、四六、四七号
《↓【九】》
一九五〇　"Japanese Sociology: Past and Present", *Social Forces*, vol. 28, no. 4, The University of North Carolina Press, N. C.
一九五〇―五一　「人間関係と労働の生産性――経営の合理化と人事管理の発展――（上、中、下ノ一、下ノ二）」、『経営評論』、第五巻一二号、第六巻一、四、六号、経営評論社
《↓「人間関係と労働の生産性」、【九】》
一九五一　「社会学に対する私の立場」（誌上討論）、『社会学評論』、第四号
一九五二　「産業における人間関係」、『教育社会学研究』、第三集
一九五二　「産業における人間関係の科学」、『社会学評論』、第七号
《↓【九】》
一九五二　「経営における人間関係とは何か」、ダイヤモンド社編『ヒューマン・リレーションズ』、ダイヤモンド社
《↓【九】》
一九五三　「日本社会の階級的構造」、朝日新聞、二月一〇日
一九五三　「六大都市の職業移動（上、下）」、朝日新聞、四月

八日、九日

一九五三　「職業の貴賤」、『新潮』、第五〇巻五号、新潮社

一九五三　「わが国六大都市の社会的成層と移動」（共著：西平重喜）、『社会学評論』、第一二号

一九五三　"Social Stratification and Mobility in the Six Large Cities of Japan" (by Japan Sociological Society Research Committee), *Transactions of the Second World Congress of Sociology*, vol. 2, International Sociological Association.

一九五三　「ソーシャル・テンションとは何か」、日本人文科学会編『社会的緊張の研究』、有斐閣

一九五三　「従業員の態度調査の方法について」、『日労研資料』、第二二六号、日本労働研究所

一九五四　Japanische Arbeiter zwischen Gewerkschaft und Werksleitung, *Soziale Welt*, Jg. 5, Arde Verlag GmbH, Dortmund.

一九五五　「従業員態度調査はいかにおこなうか――アメリカにおける近況を中心として――」『経営者』、第九巻七号

一九五六　「従業員態度調査について」、『戦後硫安労働の実態――硫安労働一〇〇号記念特輯――』、日本硫安工業協会調査室労働課

一九五六　「産業社会学」、『労政月報』、第八号、労働省労政局労働教育課

一九五六　「わが国における社会的移動」、（日本社会学会調査委員会、共同執筆）、『社会学評論』、第二五号

一九五六　「人間関係と労働の生産性」、『鉄鋼労務通信』、第五〇三号、日本鉄鋼連盟

一九五七　"Sociology in Japan: Accommodation of Western Orientations", H. Becker & A. Boskoff, ed. *Modern Sociological Theory – in continuity and change* –, The Dryden Press, N. Y.

一九五七　「医師の社会的地位と医療制度に対する意見――医師意見調査報告――（一、二、三、完）」（共著：鈴木達三）、『日本医事新報』、第一七四四～一七四七号、週刊日本医事新報社

一九五七　「労働者はどう考えているか――帰属意識調査の結果から――」、『労働文化』、第八巻二号、労働文化社

一九五七　「アメリカ社会学の現状」、『アメリカーナ』、第三巻四号

一九五七　「日本光学における従業員帰属意識の調査について」、『日労研資料』、第三六五号

一九五八　「四国電力における従業員態度調査について」、『日労研資料』、第四二四号

一九五八　「人間関係と労使関係」、『経営者』、第一二巻六号、日本経営者団体連盟弘報部

一九五八　「日本のヒューマン・リレーションズ」、『マネジメント』、第一七巻九号、日本能率協会

一九五九　「産業社会学の発展と現況」、新明正道博士還暦記念論文集『社会学の問題と方法』、有斐閣

一九五九　"Some Factors Related to Social Mobility in Japan", (co-author: S. Nishihira), *Annals of the Institute of Statistical Mathematics*, vol. 10, no. 3, Institute of Statistical Mathematics, Tokyo.

一九六〇　「経営と社会の接点」、『近代経営』、第五巻三号、ダイヤモンド社

一九六〇　「組合意識と企業意識――労働者意識の構造分析」、『日本労働協会雑誌』、第一八号

一九六〇　「日本の階層構造はどう変わったか――中間層の動きを中心として――」、『自由』、第一巻七号、自由社

一九六〇　「中産階級を考える」、北海道新聞、三月四日《↓一九六〇「中間層的労働者階級」、岐阜日日新聞、四月一三日》

一九六〇　Die Anwendung der Sozialforschung in der japanischen Betriebsfuhrung, *Soziale Welt*, Jg. 11.

一九六一　「技術革新下の新しい世代――未来を切り開く企業のために――」、『マネジメント』、第二〇巻一号《↓「技術革新下の新しい世代」、【一九】》

一九六一　「日本の中間階級――その位置づけに関する方法論的覚書――」、『日本労働協会雑誌』、第三号《↓一九六四 "The Middle Class in Japan", *Contemporary Japan*, vol. 28, no. 1, 2, Foreign Affairs Association of Japan, Tokyo》《↓一九六六 P. Halmos ed. *The Sociological Review Monograph 10: Japanese Sociological Studies*, The University of Keele, Staffordshire》《↓一九六六 R. Bendix & S. M. Lipset ed. *Class, Status and Power: Social Stratification in Comparative Perspective*, 2nd ed., Free Press, N. Y.》

一九六一　「日本の経営――産業社会学の新しいフロント――」、『社会学評論』、第四五号

一九六一　「人間関係管理批判――企業経営における操縦主義と民主主義――」、『労務研究』、第一四巻一一号《↓「人間関係管理批判」、【一九】》

一九六一　「産業の近代化と経営の民主化」、『中央公論』、第八八四号《↓【一九】》

一九六一　"The Younger Generation in the Era of Automation", 【一一】》

一九六一　「調査結果から見た今後の労使関係のあり方――従業員の帰属意識をめぐって――」、『労働法学研究会報』、第四六一号、綜合労働研究所

一九六二　「労使関係と人間関係――働くものの二つの役割――」、労使関係調査会編『労使関係実態調査Ⅱ　労使関係と人間関係（一）』、中央公論事業出版
《↓「企業意識と組合意識――働くものの二つの役割――」、【一九】》

一九六二　「日本の経営――その伝統主義と民主主義――」、『別冊中央公論経営問題』、第一巻、秋季号
《↓【一九】》

一九六三　「職業と現代の人間」、『中央公論』、第九一三号
《↓一九六四　"Modern Man and His Occupation", *Journal of Social and Political Ideas in Japan*, vol. 2, no. 2, Center for Japanese Social and Political Studies, Tokyo.》
《↓【二〇】》

一九六三　"Traditionalism, Democracy in Japanese Industry", *Industrial Relations*, vol. 3, no. 1, Institute of Industrial Relations, University of California, Calif.
《↓一九六四　"Traditionalism and Democracy in Japanese Industry", *Transactions of the Fifth World Congress of Sociology*, vol. 3》
《↓【二二】》

一九六五　「技術革新と人間の問題」、東大公開講座『技術革新』、東大出版会
《↓【一九】》
《↓ "Technological Innovation and Human Problems", 【二二】》

一九六五　"Social Mobility in Japan: A Report on the 1955 Survey of Social Stratification and Social Mobility in Japan", (co-author: S. Nishihira), *East Asian Cultural Studies*, vol. 6, no. 1-4, Center for East Asian Cultural Studies, Tokyo.

一九六五　「経営参加のすすめ」、『中央公論』、第九三一号
《↓【一九】》
《↓ "A Program for Workers' Participation in Management", 【二二】》

一九六七　「沖縄のジレンマ」（共著：辻村明）、『朝日ジャーナル』、第九巻二〇号

一九六七　「経営参加体制と労使関係の近代化（一、二、三）」、『マネジメント』、第二六巻六、七、八号

一九六七　「仕事かレジャーか」、『中央公論』、第九五五号
《↓【二〇】》
《↓ "Workers Think of Their Work and

Leisure",【二一】》
一九六七「経営参加再論――労使関係近代化のために――」、『日本労働協会雑誌』、第一〇〇号
一九六七「機械文明と労働問題」、『月刊労働問題』、第一一三号、日本評論社
《↓一九六七　東京大学公開講座『人間と機械』、東大出版会》
一九六七「現代における職業の意義」、『郵政』、第一九巻四号、郵政省人事局要員訓練課
一九六八「単調労働対策について」、『賃金と雇用』、第一九二号、労働基準調査会
一九六九「労働者の経営参加」、『月刊労働問題』、第一三五号
一九六九「単調労働とその対策――疎外体制から参画体制へ――」、『エコノミスト』、第四七巻四二号
一九六九「高度産業社会における職業と労働」、『中央公論』、第九八一号
《↓【二〇】》
一九七三「参加と自治――従業員の経営参加について――」、『労務研究』、第二六巻一号、日本労務研究会
一九七三「人間と機械」、『安全』、第二四巻三号、中央労働災害防止協会
一九七四「脚光浴びる経営参加」、『経営レビュー』、第二六一号、日本事務能率協会
一九七四「管理者の社会的責任――参加的指導と人材開発――」、『季刊マネジメント・ジャーナル』、冬季号、日本経営協会
一九七四「経営参加――その理念と方法――」、労働新聞、第一〇六四～六七号
一九七四「現代社会における自己実現の諸形態」、『職研』、第八号、職業研究所
一九七五「参加革命の理論――第四七回日本社会学会大会における会長講演――」、『社会学評論』、第一〇〇号
一九七五「経営参加の日本的形態を考える」、『日本の経営文化』、第七号、中央経済社
一九七七「小集団自主管理体制をめざして――職場レベルの経営参加指針――（一、二、三）」、『日本労働協会雑誌』、第二一三～二一五号
一九七九「現代社会における自己実現――一九七八年度一般教養講義『日本人の職業』最終回――」、『上智経済論集』、第二五巻三号
一九八二－八三「日本的経営の神話と現実（上・下）」、『日本労働協会雑誌』、第二八五、二八六号）
一九九〇「社会成層と社会移動の研究」、『日本学士院紀要』、第四五巻、第一号

三　座談会録・学会議事録・エッセイ・その他

一九三三　「社会科学的真理の本質」（第八回日本社会学会大会報告要旨）、『年報社会学』、第一輯

一九三四　「社会環境の構造――社会環境論序説の一――」（第九回日本社会学会大会報告要旨）、『年報社会学』、第二輯

一九三五　「職業の倫理」（第一〇回日本社会学会大会報告要旨）、『年報社会学』、第三輯

一九三六　「職業社会学の構想」（第一一回日本社会学会大会報告要旨）、『年報社会学』、第四輯

一九五〇　「社会学とその周辺」（座談会）、『社会学評論』、第三号

一九五〇　「アメリカ社会学会通信（一、二）」、『社会学評論』、第一、二号

一九五一　「あの頃の思い出――尾高尚忠を悼みて――」（共著：尾高京子）、『音楽之友』、第九巻五号

一九五一　「人文科学の分類について」、文部省人文科学委員会編『人文科学の分類』

一九五一　"Occupational Sociology" (review), *Japan Science Review; Literature, Philosophy and History*, vol. 2, Union of Japanese Societies of Literature, Philosophy and History, Tokyo.

一九五二　「国際社会学パリ会議に出席して」、『社会学評論』、第八号

一九五三　「福武、日高、高橋君のプロフィール」、『書斎の窓』、第五六号、有斐閣

一九五四　「リエージュ日記――第二回世界社会学会議に出席して――」、『社会学評論』第一六号

一九五五　「日本社会の断面」、朝日新聞、七月一四日

一九五五　"Sangyo ni okeru Ningen Kankei no Kagaku (Science of Human Relations in Industry)" (review), *Japan Science Review; Literature, Philosophy and History*, vol. 7.

一九五六　「人間関係の改善について――ヒューマン・リレーションズを語る――」（座談会）、『労働文化』、六月号

一九五六　「林先生の人と業績」、林恵海教授還暦記念論文集『日本社会学の課題』、有斐閣

一九五六　「亡き兄朝雄の思い出」、『文藝春秋』、第三四巻七号

一九五七　「人間関係について」（座談会）、『婦人と年少者』、第五巻三号、婦人年少協会

一九五七　「職業」、『世界大百科事典』、平凡社

《→一九六五、『世界大百科事典』、平凡社》

一九五七　「学生運動リーダー訓練講座」、東京大学新聞、一一月六日

一九五八　"Imono no Machi - Sangyo Shakaigaku-teki Kenkyu (A Foundry Workers' Town: An Indust-

rial Sociological Study)" (review), *Japan Science Review: Literature, Philosophy and History*, vol. 9.

一九五九「世界社会学会議に出席して」、朝日新聞、九月二九日

一九六〇「日本の経営を解剖する」(シンポジウム)、『マネジメント』、第一九巻一一号

一九六〇「第四回世界社会学会議に出席して」、『社会学評論』、第三七号

一九六一「経済成長とエリート」(座談会)、『エコノミスト別冊』、四月号

一九六一「組合員と従業員」、『中央公論』、第八八二号

一九六二「南北アメリカを旅して(上・中・下)」、毎日新聞、一〇月一六・一七・一八日

一九六二「労使協議制について」、日本労働協会労働問題フォーラム、『日本労働協会雑誌』、第四三号

一九六二「サラリーマン重役の功罪——戦後経営者に期待されるものは何か——」(座談会)、『朝日ジャーナル』、第四巻二二号

一九六三「幹部候補生の忠誠心」(座談会)、『中央公論』、第九一〇号

一九六四「アメリカ経済の体質と病巣」(座談会)、『朝日ジャーナル』、第六巻三号

一九六四「国際化に対処する経営者の条件」(対談)『別冊中央公論経営問題』、第三巻、夏季号

一九六四「大いにエリートをつくろう」(座談会)、『事務と経営』、第一八一号、日本経営協会

一九六四「さまよえる忠誠心」(座談会)、『潮』、第四八号、

一九六四「日本人の職業観——今日の状況と将来の展望——」(座談会)、『マネジリアル・サイエンス』、第二巻四号、輿論科学協会

一九六五 "Proceedings of the International Symposium on Cross-National Research on Social Stratification and Social Mobility in East Asian Countries", (co-editor), *East Asian Cultural Studies*, vol. 6, no. 1-4.

一九六五「経営参加の新しい着眼」(対談)、『近代経営』、第一〇巻八号

一九六五「閉会の辞」、大塚久雄編『マックス・ヴェーバー研究』、東大出版会

一九六六「経営参加制度と労使関係の近代化」、昭和四〇年度労使関係研究会議特集第三セッション基調報告、『日本労働協会雑誌』、第八六号

一九六六「これからの雇用のヴィジョン(一、二)」(対談)、『職業安定広報』、一月一日号、一一日号、労働省職業安定局

一九六六「ソ連の研究、一変――世界社会学会議に出席して――」、朝日新聞、九月二七日
一九六六「ソ連の新しい社会学（上、下）」、朝日新聞、一一月七日、八日
一九六六「なぜ社会学を選んだか」、産経新聞、五月一二日
一九六六「仕事とレジャー」、『潮』、第七二号
一九六七「サラリーマンの『解放』とは何か」（座談会）、『別冊中央公論経営問題』、第六巻、冬季号
一九六七「安田三郎君に答える」（誌上討論）、『社会学評論』、第七〇号
一九六八「職業と幸福」、新潟日報、九月一六日
一九六八「経営者からみた経営参加」（座談会）、『別冊中央公論経営問題』、第七巻、春季号
一九六八「社会学から何を学ぶか」（座談会）、世界の名著第四七巻『デュルケーム　ジンメル』付録、中央公論社
一九六八「疎外体制から参画体制へ」、『組織科学』、第二巻三号、組織学会
一九六九「労使関係研究の回顧と展望」（座談会）、『日本労働協会雑誌』、第一二一号
一九六九「経営社会学」、体系経営学辞典、ダイヤモンド社
一九六九「東大を去るにあたって」、産経新聞、三月一一日
一九七〇「ウェーバーに学ぶ」（座談会）、世界の名著第五〇巻『ウェーバー』付録、中央公論社
一九七五「戦後の労使関係を振り返り今後を展望する」（座談会）、『日本労働協会雑誌』、第二〇〇―二〇一号
一九七九「なんのための経営参加論議か」、『日本労働協会雑誌』、第二四一号
一九八五「青春時代の読書行動」、『現代社会学』、第二〇号、アカデミア出版
一九八五「粕谷編集長の思い出」、『中央公論』、第一一八九号
一九八八「集団主義と日本的経営」、上智大学学際教育フォーラム「転機に立つ日本型経営者」、『上智経済論集』、三三巻二号

引用文献

遠藤惣一、一九八七、「戦後日本の〈企業・労働・産業〉の諸問題」、『社会学評論』、第一五〇号
間宏、一九七五、「産業社会学の再考と展望」、『社会学評論』、第一〇〇号
福武直・青井和夫編、一九七二、尾高邦雄教授還暦記念論文集第三巻『集団と社会心理』、中央公論社
稲上毅・川喜多喬編、一九八七、『リーディングス日本の社会学9　産業・労働』、東大出版会
北川隆吉、一九七九、「労働社会学と社会政策学」、『季刊労働法』別冊第五号『社会政策』、総合労働研究所
森岡・本間・塩原編、一九九三、『新社会学辞典』、有斐閣
清水幾太郎、一九九三、『わが人生の断片』、清水幾太郎著作集第一四巻、講談社

新明正道、一九五一、『社会学史』、有斐閣
富永健一、一九九三、「戦後日本社会学の発展とその問題」、『社会学史学研究』、第一五号、日本社会学史学会